

No.117 会社訪問

代表取締役 蜂谷 真弓氏



坂口電熱株式会社

会社プロフィール

代表者：代表取締役 蜂谷 真弓

所在地：秋葉原本店 〒101-0021 東京都千代田区外神田1-12-2

TEL：03-3253-8211

創業：大正12年（1923年）

設立：昭和23年（1948年）

資本金：4億6千万円

営業所：城北／西東京／横浜／静岡／名古屋／関西／岡山／九州
SN営業部／グローバル営業部

事業所：江東橋ビジネスセンター／佐倉R&Dセンター

事業内容：電熱技術をベースにした真空・バイオ・光学・化学分野
などの製品開発と電熱機器の製造・販売

URL：http://www.sakaguchi.com

聞き手：南 明則（広報副委員長） 筒井紫乃（広報委員） 岡田康弘（事務局） 取材・編集：クリエイティブ・レイ㈱

あらゆる産業に欠かせない「熱」と向き合いながら
創業者の想いを受け継ぐ老舗「総合電熱」メーカー

— 創業の経緯や、御社の主な事業内容についてお聞かせいただけますか。

弊社は1923年（大正12年）、私の祖父でもある創業者・坂口太一によって浅草小島町で産声をあげました。祖父が亡くなった二年後に私は生まれたので、直接話を聞いたわけではありませんが、母や祖母など家族から生前の太一の話のいろいろと聞いております。

坂口太一は、もともと親族が経営するラシャ（軍服やコートなどに用いられる厚手の毛織物）問屋で働いていたそうです。ある日、太一は営業先の仕立て屋で汗をかきながら懸命にアイロンをかける若い衆の姿を目にします。当時の業務用アイロンは電気式ではなく、炭を燃やした熱を利用する炭火アイロンでした。家庭で使用されていた電気アイロンは重量が足りず、厚手のラシャには使えません。また、炭火アイロンは重く、アイロン内の炭が燃え尽きるたびに新たに炭に火を起こして交換しなければならないため、大変な手間と労力がかかりました。「あれでは勉強や読書の時間が持てないだろう、何とかしてやれないものか……」と、

太一は彼らをもっと快適に使い、業務用としても耐えられるヘビーデューティな電気アイロンの開発を決意します。今でいうアパレル業界出身の人ですから電熱製品についての知識はほとんどゼロということもあり、アイロンについてイチから研究・開発を始めました。試行錯誤の末、ようやく製品化にこぎつけた工業用



昭和初期に製造した
当時の工業用電気アイロン



昭和34年頃の初荷の様子（店頭にて）

右側…創業者 坂口太一、右から2番目…二代目社長 坂口美代子

電気アイロンは評判を呼び、さらに割賦販売という販売手法も取り入れたことで、服飾業界を始めとして、一気に広まっていきました。

服飾業界から電熱業界に転身したのは、新しいもの好きで柔軟な発想の持ち主であったこと以上に、常日頃から人様の役に立ちたいと考え行動していた祖父の気質が原動力となっていたのではないかと思います。

おかげさまで弊社は今年で94周年を迎えました。創業以来およそ一世紀にわたり、あくなき努力によって培われてきた高度な技術力で多様なニーズにお応えしてまいりました。その間、約300万点もの電熱製品を手がけてきましたが、この電気アイロンこそが、すべての製品のルーツであり、94年もの長い道のりのはじめの一歩となっています。

現在の主力商品は、半導体など様々な分野の製造工程に用いられる電熱部品です。産業用に特化し、製造業から研究・開発分野まで時代を取り巻く環境のニーズに応える形で、常にその時代の先端産業を支えてまいりました。秋葉原の中央通りに面した秋葉原本店では、ニクロム線と呼ばれる電熱線やヒーターなど「熱」に関する様々な製品を取り扱っており、世界一の品ぞろえを誇っています。

来店されるお客さまには、研究者やエンジニアといった方々が多くいらっしゃいます。秋葉原という場所柄、近隣に大学も多いですし、つくばエクスプレスが開通してからは、つくば方面からのお客さまも多くいらっしゃるようになりました。かつては、作業着姿の本田宗一郎さんが油で手を黒くしたまま訪れて、部品を探していらしたという話も聞いております。

—— 経営者として印象に残っている出来事や喜びを感じたことなどがあれば、お聞かせください。

最も喜びを感じるのは社員が日々成長していく姿を見ることです。

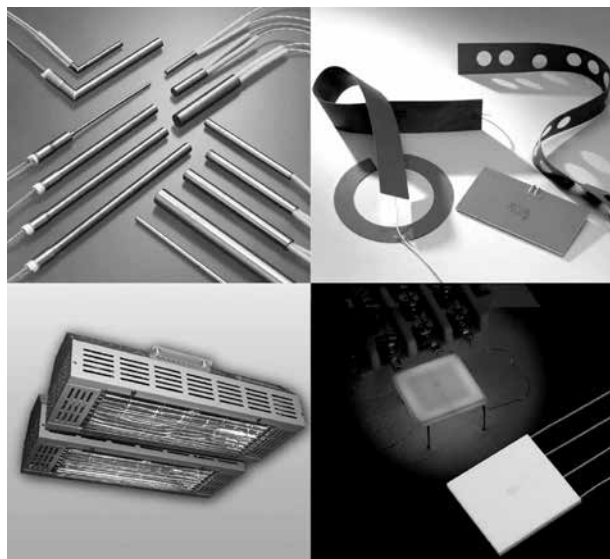
例えば、千葉県佐倉市に「佐倉R&Dセンター」という設計・研究開発拠点があるのですが、開発に携わる社員の中に、入社6年目の女性社員がおります。男性ばかりの技術者の中で先輩たちのアドバイスを受けながら開発に取り組む姿を見守ってきました。困難な課題をひとつひとつ諦めずに克服していくたびに、顔つきまで成長してみえて、大変うれしくなりました。試行錯誤の末、薬液ヒーターの製品化までこぎつけた彼女を、とても頼もしく思っています。

社員には経験や知識を重ね、技術力も人間力も高めて、それらを次の世代にしっかりと受け継いでほしいと願っています。各自が努力を積み重ねるのはもちろんですが、その時々最適な製品、最高の技術、良い心づかいとともに継承していくことで、今後100年、200年と、長きにわたりお客様にご愛顧いただけると信じています。

母が長年、社長として会社を運営してきたのを見てきましたから、女性だからといって社長を務める上で、特別な悩みなどを抱いたことはありません。あえて挙げるとすれば体力的な差でしょうか、そのため体力をつけるように日々心がけています。



秋葉原本店



左上…カートリッジヒーター、右上…シリコンラバーヒーター
左下…つり下げ式暖房器ニューソーラービーム、右下…マイクロセラミックヒーター

— これまで経営上もっとも困難だと感じになった出来事があれば、お聞かせいただけますか。

90年以上の歴史がある会社ですから、私が社長に就任する以前の様々な状況を経て、現在の坂口電熱がありますので、まずはそのことに対して創業者と先代の社長をはじめ、先人・先輩方に大変感謝しております。私は2008年に三代目社長として経営のバトンを受け継ぎました。就任後まもなくリーマン・ショックが起り、その影響が出てきたところが私にとっても、会社にとっても困難な時期でした。弊社は、ひとつの業界だけではなく、いろいろな分野のお客さまとお取引ささせていただいています。時代によって景気の良い業界もあれば、不景気な業界もありましたが、全体としては極端な浮き沈みもなく、おかげさまで安定した経営を続けることができていました。ところが、リーマン・ショックの影響はそれまでとはまったく違いました。どの業界も不景気に陥り、売り上げも惨憺たる有様で、身を削られるような思いをしたのを覚えています。しかし、「何事も起きることには意味がある」と思っていましたので、代替わりした後にリーマン・ショックの影響があったのは、まさに“三代目の通るべき道”だったのではないのでしょうか。

周りが、すべからず不景気でしたから、こうなった以上、自分たちのやり方で乗り越えるしかないだろうと腹を決め、ポジティブに考えるようにしました。そのとき大きな心の支えとなったのが、渋沢栄一翁のひ孫にあたる、渋沢雅英さま（公益財団法人渋沢栄一記念財団理事長）とお話しした際にかけていただいた、ある言葉です。ちょうどそのころ、渋沢栄一記念財団が渋沢栄一翁の渡米100周年を記念して「平成の渡米実業団」を結成するという事業が計画され、私も参加させていただきました関係で、都内で何度か渋沢理事長にお目にかかる機会がございました。ある日、「リーマン・ショックの影響で大変です…」と申し上げると、「今は大変ですが、半年くらいすれば良くなりますから…」と穏やかに、にこやかに仰ったのです。どのような根拠で仰ったかなどは関係なく、なぜか素直にほっとしました。半年頑張ればなんとかなると信じて、社内で地道にコストの適正化などに取り組みま

した。年度の前半は業績が比較的好調だったこともあり、結果的になんとか赤字には陥らずに済みました。リーマン・ショックはそうやってみんなで力を合わせて克服することができました。

東日本大震災の時、秋葉原本店は建物の構造上、揺れが激しく、ショー・ウィンドーのガラスにひびが入るなど被害がありました。幸いにも建て替えが事前に決まっていたこともあり、震災後、建物自体をリニューアルしました。

仕事柄、多くの経営者の方とお話しさせていただく機会があるのですが、みなさん共通しているなど感じるのが、100年に一度の不況など苦しい状況であっても、明るく、楽観的なことです。お会いした経営者の方々を見習ってリーマン・ショック、東日本大震災など辛いことに見舞われた時でも、社員が不安な気持ちにならないよう、意識して笑顔を心がけていました。

— 御社の経営理念や経営方針などをお聞かせいただけますか。

社是は「聖賢の教学に則り社業を通して国家社会の進化発展と人類の安心平和幸福の実現に貢献せん事を念願とする」です。根本にあるのは創業者の「私たちは生かされている。そのおかげで今日がある。したがって、企業経営は社会恩に報いるものである。」という精神です。独りよがりにならないように、聖人・賢人といわれる先人の教え（孔子の論語など）から人の道を学び、渋沢栄一翁が提唱した道経一体の経営を目指しております。社会に対して自分たちは、どんな恩返しができるかという想いが軸にあるので、特に業界などを絞らずに幅広い分野でお役に立てるよう企業活動を行っています。



毎年9月に行う（公財）坂口国際育英奨学財団の「秋季一泊研修・交流会」

ご恩返しの一環として、1988年に両親が私財を工面して奨学財団を設立し、運営を行ってまいりました。(公益財団法人坂口国際育英奨学財団)。具体的な活動として、日本の大学・大学院で学ぶ外国人私費留学生の奨学支援や各種イベント、研修交流会などを実施しています。現在まで約280人の留学生とのご縁をいただいております。この事業を通じて世界平和にいささかでも貢献できるよう続けてまいりたいと思っております。世界が平和でなければ経済発展も難しいとも考えております。

— 御社の現在の課題、今後の事業目標などをお聞かせいただけますか。

日本ではいわゆるグローバル化と人口減少が進む中、従来の製品のみでは市場が縮小していくという危機感があり、従来の弊社ビジネスモデルを緩やかに変化させていく必要性を感じております。具体的には、①製品ラインアップの更なる拡充、②アジアを中心とした海外マーケットの開拓、③レーザー加熱技術の提案力向上などに、注力していきたいと思っております。

— 座右の銘、愛読書、敬愛する歴史上の人物、心掛けているモットーなどがあれば、お聞かせください。

日頃から格言や名言などに触れ、実践できるように心がけることが大切と思っております。例えば「神様は乗り越えられる試練しか与えない」とか「万象肯定、万象感謝」など困難を感謝で受け止めて前向きに考えることで乗り越え、さらに成長するといった意味合いの言葉は常に胸に刻んでいます。先程も申し上げましたが、辛い状況であっても、笑顔を絶やさず元気な姿でいるよう心がけているのも、こういった言葉の影響もあると思っております。

最近読んだ娯楽本で楽しめたのは、アメリカ版ヴォーグ誌の名物編集長、アナ・ウィンターさんがモデルになったといわれ、映画化もされた「プラダを着た悪魔」です。上司の言動を現場がどう感じているかを追体験する意味でも、とても刺激的なストーリーでした。

歴史上の人物では特に「日本資本主義の父」ともいわれる実業家の渋沢栄一翁を尊敬しています。若い頃は尊王攘夷の過激な思想を持っていたようですが、のちに500社以上の日本を代表する株式会社の設立に関わりました。驚かされるのは、それと同じくらいの数の慈善団体等の立ち上げにも尽力したことです。その行動力と求心力も凄いと思いますが、なによりその根底にある「道徳経済合一説」は普遍的であり、世界に誇れるものであると思っています。

また、二宮尊徳が述べたといわれる「道徳のない経済は罪であり、経済のない道徳は寝言である」にも深い感銘を覚えます。

— 蜂谷社長の趣味や、休日に楽しんでいることがあれば、お聞かせください。

若い頃はスキーやピアノを楽しんでいました。子どもが小さい頃はスコーン作り(焼き菓子)に凝り、既存のレシピでは飽き足らず、これぞというレシピを追求して材料や分量などを微調整しながら夜な夜な焼いていました。最近は身体のことを考えて、週末時間の取れるときにはオーガニックな食事を楽しんでいます。移動の際もなるべく階段を使うなど、健康の維持、向上に努めています。学生の頃は、女子でロックバンドを結成し、キーボードを担当していました。日比谷の野外音楽堂で演奏した経験もあります。現在、多くの人々を前にして挨拶や講演する機会があっても、とても緊張はしますがあまり物怖じしないのは、そんなステージ経験が生きているのかもしれない。

趣味に関しては、興味を持ったことをとことん追求してある程度極めたと感じると、すぐまた別なことに挑戦し始める性分かもしれません。

— 最後に当協会に対してご意見・ご要望などがありましたらお願いいたします。

今日の我が国の科学技術の発展を長年支えてこられた会員企業の皆様とご一緒させていただけることをとても光栄に思っています。弊社が培ってきた「電熱」という分野で、今後少しでも皆様のお役に立てれば幸いです。